

はり全体的には講習済み地区が未講習地区より正答率が高く、未講習地区では都市部であっても郡部より正答率が高いとは限らない傾向にあった。また大都市である札幌市は園が多すぎるためか受講にばらつきがあることも伺えた。

ただ①、⑤、⑦ではa, bでもエピペンが必要という過剰反応も認められ、やはり一度だけの講習の限界も示され、講習を繰り返し実施する必要性を認めた。

この正解率の位置づけを比較検討する園での資料は手元にないが、即時型食物アレルギー全国モニタリング調査の協力医師で、エピペン自己注射登録医を対象にした類似の調査（平成23年）¹⁾があり、それと比較する。aでは講習済み地区はほぼ同等であったが、むしろc, d, eでは園側の正答率は医師側より高く、講習の効果が現れたと考えられた。しかし一方未講習地区ではc, d, eへの正答率が医師側より低い結果であった。講習を積み上げてゆくことで、園の現場でも医師並の判断ができる可能性を示唆した。

救急車の園への到着時間では、15分以上と答えたのは④、⑥、⑧で7～13%を占め、やはり医療機関の分布の地域性を反映している。また救急車で運ぶ時間で1時間以上は⑥のみで6%であった。道東地域の医療機関は一極集中型であり、このような事態は予想されたが、それであればこそ地元での実践的な講習の必要性があり、エピペンは救命のためにも普及が急がれると思われた。

【結語】

特に地域を問わず道内のほぼ3割の保育園に、アナフィラキシー園児が在園しており、そして7%の園にはエピペンを処方されている園児が在園していることは驚くべく数字である。しかし、エピペンの講習は一部の保育士にとどまり、まだ模擬訓練を受けていない園が過半数に達している。一部の地域を選択して比較検討すると、本会が講習会を実施した地域とそうでない地域には、講習会への参加、模擬訓練、エピペンの理解度などに歴然とした差があった。今後食物アレルギー、アナフィラキシー園児への正しい対応のため、本会、医師会、保育団体などが共同して講習会を広めてゆく必要がある。

【謝辞】

この度の調査を行うにあたり、研究費の助成をいただいた北海道医師会に厚く御礼申し上げます。またアンケート調査にご協力いただいた保育園関係者の皆様、集計にご尽力いただいた北海道医師会事業第四課の皆様にご心より御礼申し上げます。

【文献】

- 1) 今井孝成、杉崎千鶴子、海老澤元宏
アナフィラキシー症状におけるアドレナリン投与のタイミングに関する意識調査
アレルギー 62: 1511～1521. 2013

報 告

ネパール大地震被害救援活動等への支援について

◇総務部◇

4月に発生したネパール大地震による被害救援活動に対する支援について、先般、北海道医報等にて協力要請をいたしましたところ、会員各位および各都道府県・郡市・医療機関医師会等より、日本医師会に総額33,627,768円（8月14日現在）の支援金が集まりました。なお、当会からも30万

円の支援をいたしております。

支援金は、現地で緊急支援活動をしている特定非営利法人AMDAを中心に配賦されましたので、ご報告申し上げます。

皆様のご協力に心より御礼申し上げます。